　俺の幼馴染の青穂は、実にいい女だ。
　気さくで元気が良くて、小さい頃からずっと一緒に遊んできた親友だ。

　ただ、なんというか。
　あいつは俺に対して遠慮がなさすぎるというか、大胆過ぎるというか。
　世間一般の幼馴染というものをよく知らないから断言することはできないのだが、どうもそんな気がしている……。

思春期：
「おーい、悠斗〜」
　今日もまた、青穂が俺の家にやってきた。
　世の中の大抵の男女は、幼馴染といえども思春期になって以降は距離をおくのだろうが、こいつはぜんぜん変わりがない。
「今日もセックスしよーよ。どっかに出かけてヤるとかどう？」
　それどころか、性に目覚めてからは毎日のように盛り合って、今じゃこんなことまで言ってくる始末だ。
　俺との距離感ばかりか、俺に対する貞操観念までゼロ。
　他のやつに対してはどうなのか知らないが……。
「ああ、いいんじゃないか？」
　俺は遠慮なく近くに寄ってきた青穂の乳房をシャツの上からまさぐりながら、頷いた。
「で。出かけてって言っても、どこでするんだ？」
「ん？　んーっ……」
　青穂は心地よさそうに俺の愛撫に身を委ねながら、少し考えていたが。
「あ、そうだ。ユーエンチとかどう？」
　そう言って、にやにやと笑う。
「悠斗にはどーせ、一緒にデート行く相手なんかいないんでしょ。あたしが付き合ってやるよ」
「おいおい……」

　俺はもう片方の手を青穂の脚に伸ばしながら、呆れたように肩をすくめる。
「俺はともかく、お前には彼氏いるんだろ。いいのかよ」
　まあ、こんなことしておいて今更デートくらい気にすることか、って感じもするけど。
「別にいいでしょ。あいつとはまだ、こーゆーこととかする仲じゃないんだしさ」
　青穂はそう言いながら、俺のズボンの上から股間を撫で回す。
「まだ、って……」
　恋人でもないただの幼馴染の俺とは、毎日のようにこんな事をしてるのに？
「それじゃ、あいつとはどこまでいってるんだよ？」
「ん？　キスはしたよ」
「それだけか？」
「うん」
　あっさり頷く青穂。
「……そうか」
　俺は、そんな青穂の体を引き寄せる。
「わっ、何？」
「青穂、キスしよう。久し振りに」
　返事を待たずに、俺は彼女をぐっと抱き寄せると、唇を奪った。
「……んっ」
　最初は驚いて目を見開いていた青穂だったが、すぐに目を閉じて、俺の背中に手を回してきた。
「ちゅっ、ちゅぱっ、れろ……れる……」
　しばらくの間、俺たちは抱き合って、互いの唇を貪り合った。
　舌を絡め合い、唾液を交換し合う濃厚なディープキス。
　そして、長い口付けが終わると、俺たちの間に銀色の糸が引いた。
「ぷはっ……、いきなりどうしたのさ、悠斗？」
　頬を赤く染めて、少し息を乱しながら、青穂が聞いてくる。
「いや、ちょっとな……」
　俺が言葉を濁すと、彼女は察したように笑った。
「ふーん、なるほどね。あたしとあいつのキスを上書きしたかったんだ？」

「別に……そういうわけじゃ。俺は、お前の恋人ってわけでもないし……」
　そう歯切れの悪い返事をすると、また笑われる。
「あはは、素直じゃないなあ。あたしに彼氏が出来たら寂しくなっちゃったんでしょ？ かわいいとこあるじゃん、悠斗のくせに」
　からかうように言う青穂。
「……言ってろ」
　俺はもう一度青穂の体を抱き寄せて、キスをする。
　今度はさっきよりも優しく、舌を絡ませ合いながら、ゆっくりと体を撫で回す。
「んんっ……ふぅっ……」
　その度に、ぴくっ、ぴくっと反応する青穂。
　長いキスを終えると、彼女は蕩けた目で、俺にしなだれかかってきた。
「ねえ、悠斗ぉ。ユーエンチとかの前に、ここで一回ヤろうよぉ」
　そう言って、上目遣いで見上げてくる青穂。
「ああ、もちろんいいさ」
　俺は頷くと、青穂の服の隙間から手を挿し込んで、乳房を直接捏ね回し始めた。
　もう片方の手は、下の方へ滑り込ませる。
「んふ……♡」
　青穂も、同じように俺の服の間に手を挿し込んで、胸板や股間を撫で回す。
「よく濡れてるな。それに、すごく熱いぞ」
　俺は青穂の割れ目をなぞりながら、浅く指を挿し込んだ。
　そこはもうぐちょぐちょになっていて、軽く掻き混ぜるだけでいやらしい水音を立てる。
　少し弄った後で一旦指を抜いて、ねっとりと濡れた指先を見せつけてやった。
「悠斗だって熱いし、濡れてるよ」
　青穂の掌が俺の竿を包み込み、指先が亀頭の先端をつうっとなぞった。
「ふふっ。ほらほら」
　青穂がお返しのように、俺の先走りで濡れた指先を見せつける。
　それから、それを舌でぺろりと舐め取った。
　その淫靡な仕草に、思わずごくりと喉を鳴らしてしまう。
「ねえ、悠斗ぉ」

　青穂は甘えるような声で言うと、俺を押し倒してきた。
「今日は、あたしが攻めてあげるね♡」
　そう言うと、俺の上に跨ってくる。
　着衣をずらして先端に秘裂をあてがい、そのまま腰を沈めるようにして、ずぶぶっと一気に奥まで挿入した。
「んぁっ……！」
　甲高い喘ぎ声を上げながら、背中を反らす青穂。
「はは……、そんなざまで、俺を攻めるなんてことができるのかよ？」
　正直なところは俺も、ちょっと気を抜いただけですぐにでも達してしまいそうだったが。
　青穂の中は、いつも素晴らしい熱さと柔らかさで、俺のモノを締め付ける。
　まるで別の生き物のような動きで絡みつき、貪欲に吸い付いてくるかのようだった。
「へへっ、余裕かましてるけど、悠斗の方こそイっちゃいそうなんじゃないの？ もう出ちゃいそうな感じだけど？」
　挑発的な笑みを浮かべて言う青穂の腰を掴むと、俺はぐっと歯を食いしばって、腰を突き上げた。
「きゃうっ！？」
　突然の反撃に、悲鳴じみた声を上げる青穂。
「イきそうなのは、お前の方だろ……っ！」
　ぱんっぱんっと肉を打つ音を響かせながら、激しくピストンを繰り返す。
　腰を掴むことで、相手に動きの主導権を与えない。
「あっ♡ ああぁっ！ だめぇっ！！」
　子宮口を突かれる度に、びくびくっと体を震わせる青穂。
　その顔はすっかり蕩けきっていて、口の端からは涎を垂らしていた。
「あんっ♡ そこぉっ！！ああーっッ♡♡♡」
　激しい快楽に耐えかねたように、ぎゅっとしがみついてくる青穂。
　汗ばんで火照った肌同士が密着する感触が心地良い。
　このままずっと繋がっていたいくらいだが、そろそろ限界が近いようだ。
　最後に一発大きく突いてから、勢いよく引き抜く。
　どくどくと精液が飛び散り、彼女の白い肌の上に降り注いだ。

「ああぁぁ〜〜ッッ♡♡♡！！！」
　同時に絶頂を迎えたらしい青穂も、体を弓なりに反らせて絶叫していた。
　大きくびくんと痙攣した後、ぐったりと脱力してしまう。
　青穂は荒い呼吸を繰り返しながら、力なく寄りかかってきた。
「はぁ……っ、はぁっ……、悠斗ぉ……」
　甘えた声で言いながら、俺の顔を見上げてくる青穂。
　その表情には、まだ物足りなさそうな色が浮かんでいた。
「もう一回、したいなぁ……」
　潤んだ瞳で見つめられて、ドキッとする。
　そんな目で見られたら、断れるわけがないじゃない。
「……遊園地は、もういいのか？」
　がっついているように思われるのも嫌で、俺はわざとそんなことを聞いてみた。
　すると、青穂は悪戯っぽく笑う。
「うん。もういいや。それより、悠斗とセックスしてた方が楽しいもん」
「……そうか」
　俺は苦笑すると、再び青穂を押し倒した。
「あはは。あたしたちって一緒にユーエンチだとか、そういうデートみたいなことには縁がないみたいだね」
「いいんじゃないか。……その、俺とお前とは、恋人同士とかってわけじゃないんだから。だろ？」
　少し顔を逸らしながらそう言うと、青穂は無邪気そうに笑って、俺にしがみついてきた。
「そうだね。あたしと悠斗は幼馴染だから、そういうのはいらないよね」
　そして、ちゅっと音を立てて唇を重ねてくる。
「……まあ、そうだな」
　俺は頷きながらも、内心少しもやもやしたものを感じていたのだった。

青年期：
「おー、悠斗。久し振りだね〜」